

家族形成期における源家族の影響に関する経験

— 20代既婚女性を対象に —

鬼塚麻衣

問題・目的

家族形成期は、1組の男女が結婚して独立し、子どもの誕生によってその基礎的な構造を形づくっていく時期であり、その過程で源家族における子ども、つまり「育てられる立場」から、新たに形成した家族における親、つまり「育てる立場」へと180度の立場の転換を迫られることとなる（神崎，2008）。

源家族の影響に関する研究は、被養育体験の世代間伝達という形で母子を対象にした研究が多く報告されており、近年、虐待といった負の世代間伝達がどのように繰り返され、いかに繰り返さないか、という抑制要因に焦点があてられてきている（木本・岡本，2007；林・横山，2010）。林・横山（2010）の母親の被養育経験における研究では、ネガティブな被養育経験の連鎖を断ち切った群の特徴として、伝達の認識を持ち、されて嫌だったことおよび子どもにしたくないことを具体的に意識するということの重要性が示唆されており、一般家庭におけるネガティブな被養育経験の場合、意識することでうまくいく可能性が高いと思われる知見が報告されている。

世代間伝達を始めとする被養育体験は、虐待といった分野だけでなく、広範囲として家族を形成する上での多様な葛藤も引き起こしており、Susan Forward（1989 玉置悟訳 2001）は、子どもに悪影響を与える親にならないためには、「親のようにはならない」という決意が必要である、としている。

また、源家族での経験が自身の夫婦関係という親密な関係を形成していく上で、その原形を提供している可能性が高いことが示唆されており、性役割観も、そのようなプロセスに織り込まれて受け継がれている可能性がある（数井，1998）。そ

のため夫婦間では、お互い自分が生まれ育った源家族やそれ以前の世代から受け継いできた価値観、家族イメージ、関係パターンなどを受け入れながら、現在の自分の世代に合うように修正したり、選択できるか、といったことが求められ、各々源家族の中で身についてきた様式が、通用しない、合わないと感じることは少なくないことがいえる。

世代間伝達は良い側面も持っており、池田ら（2011）の研究において、親に対する感謝が次世代育成力を育てる心理的規制を「世代間伝達の好循環」としてまとめ、親にしてもらってうれしかったことなどは、次の世代の子どもたちにもしていきたいということがあきらかにされている。諸井ら（2013）の女子青年を対象にした親との接触経験が親準備性傾向の形成に及ぼす影響に関する研究では、過去の親との肯定的経験・否定的経験のいずれも、自身が将来よき親になりたいという動機づけに繋がることが示唆されている。

このことから、過去の源家族の経験や源家族の影響は、自身の家族において葛藤や肯定的な動機づけに繋がることが示唆される。しかしながら、自身の家族を持つ過程で、源家族や世代間伝達等の影響をどのように経験しているのか、という部分は明らかにされているものは見当たらない。

日本の家族において女性は家事や育児において役割の中心を担うことが期待され易く、育児期の夫婦では妻の方が夫に比べて配偶者への情緒的ケアをより多く行っていること（平山，1999）が明らかにされている。加えて、女性は男性よりも、役割意識や妻になることへの意識が高く、早期に発達することが明らかにされている（小野寺，2003）。このことから家族形成期の女性に着目することは、重要だと考えられる。

そこで本研究では、家族形成期の女性を対象に

家族成員間の関わり方や雰囲気に着目して、家族形成期の女性が、自身の家族の中で源家族の影響をどのように経験しているか、家族形成期における女性への理解に繋げることを目的とする。

方法

研究協力者 家族形成期に該当する20代の既婚女性3名

調査時期 2014年8月

手続き 研究協力を依頼し、日程の調整を行った。場所は研究協力者が希望する場所、インタビューの趣旨、倫理的配慮について説明し、理解と了承を得た後に、インタビューを行った。質問事項をあらかじめ選定し、事前に作成したインタビューガイドに沿い半構造化面接でインタビューを実施した。

分析方法 現象学的アプローチによる分析

結果・考察

結果・考察にあたり、現在の家族を自身の家族、自身の実家家族を自身の源家族、夫の実家家族を夫の源家族と表記した。

家族形成期の女性は、自身の家族において源家族の影響を意識しにくく、源家族の影響を自身の源家族と自身の家族、自身の源家族と夫の源家族の比較、そして家族形成期において見られやすいライフイベントをきっかけに、自身の源家族の影響を、自身の家族と自身の源家族、自身の源家族と夫の源家族における相違点や類似点として、経験していた。これは、彼女が自身の家族を持ち、妻や母親という視点を得たことで、これまでとは異なる視点で自身の源家族を見ることになり、自身の源家族の影響を自覚することに繋がったのではないかと考えられる。

そして、彼女は自身の求める家族の在り方があるため、自身の家族生活の中で、違和感や上手くいかなかったり、夫への不満や苛立ちといった葛藤や感情を経験していた。

そこには、自身の源家族における生活文化や成

員の関わり方が、家族の在り方の基盤となっているため、自身の家族にもその基盤を求めることで、自身の家族において心理的な安心感を得ようとする気持ちがあるからではないかと考えられる。

彼女は、自身の源家族の経験を振り返ることで、自身の源家族の影響を自身の家族においてどのように扱っていくか考えており、自身の家族への配慮や思いやりを持ち、葛藤や困難さを経験しながらも、自身の源家族や夫の源家族の影響を調整し、自身も変化していくことで、自身の家族を形成していた。

これは、彼女が自分の家族を持つことで、家族を形成する立場から自身の源家族を振り返ることに繋がり、自身の家族における妻・母親としての役割や夫と協力して自身の家族を築いていこうという意識を持ちながら、源家族の影響について考え、家族を形成しているからであると考えられる。

本研究の臨床的意義

本研究を通して、家族形成期における女性の抱く葛藤や困難さへの理解、そして家族生活における夫との違いから葛藤を抱いている女性への理解に繋がると考えられる。また、自身の家族生活において、自身の源家族の影響を受けていると意識しにくいこと、家族生活における上手くいかなかったり葛藤の背景に時として源家族の影響があるということへの理解は、支援の一助に繋がるのではないかと考える。

本研究の限界や課題

本研究で得られた結果や知見は、対象者の年齢が限定されたものであるため、源家族の影響が自身の家族においてどのように経験されているのか幅広い年齢層で比較検討を行っていく必要があるといえる。しかしながら、源家族の影響を振り返る過程は、時として個人の源家族での嫌な経験を想起させる機会に繋がることもあるため、慎重に扱っていく必要性もある。